

「臼を据えるのやがナ。……嚙や」

「もう寒いさかい、勘忍して貰ほ……」

「阿呆云え。是まで仕込で来て今更廢められるかい。早ふ据え早ふ」

「ほんまに碌でも無い事思ひついてな……」

「……お内儀、濟んまへんが小桶に水を一杯貰えまへんやるか。」

「コレ、小桶に水入れて何するのや」

「臼取りするのに、手水が要るや無いかい。」

「シヨム無い事してなや。左様で無ふてもどれ程寒い知らん思ふて心配してるのに、水つけられて何ふするね」

「辛抱せえ、水つけなんなら情が移らんわい。……へい大きに、憚りさんでおます……オーイ蒸しは上つてるか。上つたら持て来い。諾しやア——。フーツ。フーツ。」

「何をそないに吹くのんや」

「湯気で向ふが見えんさかい、吹いて歩くのや」

「何や持てゝや無いか」

「俺かて何ぞ持たんと便り無いわい。仕様が無い依てに塵取り持つてるのや」

「そんな物持ちないナ」

「……とうない良え糯だんなア、三島だつか。サア左様だすやろ、第に光澤が違ひます。良え粘りがおますなア、こんな餅搗かされたら餅屋は一遍に腕が鈍て仕舞ひます。へえく床のお飾りさんに三寶はん、小鏡が十組でやすか。へえく、神盆を出しといて貰ひましたら大きさを合さして貰ひます。あとは皆小餅にへえ承知いたしました、うるふはムりませんので、イヤ畏りましておます。イーエ小搗きを能うして置きまへんと、お鏡さんにしましてから、肌面が荒ふおますので……」

「コレいな。そふ濡れた手で方々撫でたら、冷たふて堪らんがナ」

「八釜しい云ふない。臼の周圍に水を能ふ廻しとかにや、餅が密着くわい……へえ、いえもウ滅多に搗きの悪い様な事しやしまへん、此お長家は始めてだすけど、横町の方はズーツと親爺の代から搗かして貰ふてまんね、又寒には何卒搗餅を搗かして頂きます様に、へえお願申ます……オ、お寢間が動きましたナ、坊様お目醒めでやすか。へえ餅屋のベエが参つとります。お手々でメ、磨りなかつたらメ、が痛ふなりまつせ、起きして餅列べとくなされ、お手々が暖もります、あとでベエが餅花してお上げ申しまひよ。豪いお可愛らしい……へえ……」

「何云ふてんねナ」

「餅屋が祝儀貰ふた物やさかい、子供揃まへて辨茶羅云ふてよる處や」